



瀬川

第105号

令和6年
2月15日

仙台市小学校長会

発行者／鎌田 康彦（会長） 責任者／高橋 和之（広報部長）

主張

畏れ

副会長 菅澤 和広（東二番丁小学校）



これは自分が受けた教員採用選考の小論文の課題です。あれから今まで、機会あるたびに肝に銘じてきた言葉でもあります。

「畏れ」から思い浮かぶ畏敬や畏怖とは、教育において児童や教員の態度や感情に関する概念です。

「畏怖の念」は、児童が教員や学習環境に対して感じる一種の敬意や恐れのような感情を指し、教員や知識を提供する者に対する信頼や尊敬の念が含まれることがあります。日本の伝統的な教育環境や文化において重要視されてきた概念で、児童が教員や学習に真剣に向き合い、敬意を払うことが期待されてきました。

一方で、「畏敬の念」は、教育環境や関係において生じる尊敬や畏れの気持ちを指し、これは児童と教員、あるいは児童同士や教員同士の関係において、尊重や敬意を持って相手を尊ぶ概念です。これも、日本の教育文化や価値観において重んじられてきた要素の一つであり、児童と教員の間において信頼と尊敬の基盤を築く役割を果たしてきました。児童は教員や先輩に、教員も先輩に畏敬の念を持ち、その姿勢による学びや尊重の文化が育まれてきました。

当時の自分が何を書いたか、記憶は定かではありません。一つだけ覚えているのは、教育実習で感じた、教師という一人の人間がこれほどまでに子供たちに影響を与えていく教職の重責と怖さを忘れず、決意を持って励んでいきたいということのみです。

今年の全国連合小学校長会東京大会「主題設定の理由」の中に次の一節があります。

「(前略)現代は、グローバル化の進展や技術進歩の加速によって、社会や経済、環境等の様々な分野において前例のない変化に直面しており、未来は不確定で予想することは困難な状況にある。そのため、答えのない問題にどう立ち向かうのかが問われ、想定外の事象と向き合い対応する力や不透明な未来を切り拓く力をどう涵養していくかが大きな課題とされている。

このような中、将来この国や豊かな社会の担い手となる子供たちには、一人一人の多様な幸せとともに、社会全体の幸せの実現を目指し、(中略)常に社会の変化を柔軟に受け止め、生涯にわたって様々なことに粘り強く挑戦し、自ら学び続けていく姿勢が求められる。」

これは学校も同様です。但し、これまでも今も、学校は社会の要請に応え、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、時代の変化を機敏に捉え、教育活動を展開してきました。対応してきた先達はもとより、進めている若手中堅の教職員の熱意に敬意を持って接している日々です。

これからも私たちは自信を持ちつつ、かつ謙虚に、尊重と共感を基盤とした学びの場を築いていくことが大切だと考えます。

内容

○主張	1
○特集	2
○座談会	4
○各地区から	15

○研究部から	17
○生徒指導部から	19
○新任校長所感	20
○編集後記	24

特集 新たな試みへ挑み、実施する研究大会

視聴覚・放送教育 県大会を終えて

～第46回宮城県放送教育研究大会・ 第48回宮城県小中学校視聴覚教育研究大会～

視聴覚研究部会 会長 鈴木 一生 (八木山小学校)

第46回宮城県放送教育研究大会・第48回宮城県小中学校視聴覚教育研究大会を、令和5年11月8日(水)、本校を発信会場とし、Zoomによるオンラインミーティングを活用して実施した。

大会の実施に当たっては、本部会の活動等に予想される様々な課題を見据え、持続的な大会運営を実現するという視点から企画し運営してきた。今回の「廣瀬川」編集テーマと関連するものとして、その視点に関わることを中心に記述する。

1 本部会の抱える課題

視聴覚教育部会は、仙小・中視研の部会長が県や東北の会長に充てられる。つまり、東北の視聴覚・放送教育を担っているのは仙小・中視研である。

現在東北地区では、視聴覚・放送教育の組織を既に2県脱退して4県で運営しているが、なおもう1県も脱退を検討している状態である。また、県においても、大会における発表者や授業者は出せるものの、大会運営については不可能であるという地区が多い。このような状況であるため、現在も、そして今後も東北大会や県大会において仙小・中視研がその企画・運営の中核を担わざるを得ない。

令和7年度には、仙小教研の部会の統合が行われる。視聴覚・放送教育は、教育活動の基盤的な役割を持つものであるため、教科の研究会に属して、その指導にICTやメディア活用をするといった教員が多くなるだろうと予想される。もっと言えば、部会の存続すらも不確かな状況だと言えるだろう。

2 県大会について

(1) 開催方法について

持続的な運営を実現していくためには、大会の目標を達成できる運営方法で、かつ、できるだけ省力化し効率的に行いたい。そのために、仙小・中視研の全体会に振り替え、以下のように実施した。

① 大会ウェブページの開設

大会の情報や、申込み方法の周知、資料のダウンロード等は全てウェブページで行った。ウェブページの作成は部会長が行ったが、できるだけ簡単なもの

とし、仙小教研のウェブページに統合する形でひな形を作成し、今後引き継ぐことにした。また、申込みは難易度の低い電子メールを活用した。

② オンライン開催

オンライン開催にすることで、会場設営や接待等業務を大きく削減でき、遠方の部会員も職場を離れることなく参加できる。Zoomアカウントは300人分を用意したが、予算が許せば、今後も宮連小、宮連中、宮学視協の3団体で100名ずつ購入していくことにしたい。また、配信も業者等を介さず実施するため、配信機材は複数年にわたり購入し、パッケージとして整備した。今後の大会運営のモデルにするため、マニュアル化して引き継ぐことにする。

(2) 大会の内容について

今回の県大会は、実践発表を小学校2名、中学校1名とそれぞれの指導講評、文部科学大臣賞を受賞した自作映像教材の紹介、記念講演と3部に分けて実施した。どれも大変すばらしいものだった。

記念講演は、熊谷正朗氏(東北学院大学工学部教授 ロボット開発)を講師に迎え、「ロボットをつくる ～玉乗りロボットができたわけ～」というテーマでお話をいただいた。ロボットという「ものづくり」と、学生を育てる「人づくり」についてのお話で、メディア教材作成等視聴覚教育にある創造性と、子供たちを育てる教育という部分とで、私たちにも共通し、気付かされることの多い内容であった。大会アンケートはGoogleフォームを活用したが、ある参加者の感想の一節を抜粋する。

「僭越ではありますが、教員目線でも、教授のお話は実に聞き取りやすく、資料も端的で読みやすく、そして最後に「先生とは」までの見事な流れにハマったところ、ここ最近の講演の中でも群を抜いての素晴らしさを感じ、感銘を受けています。このお話だけでも、一冊出版できるのではと思いました。」

県大会を終え改めて感じたのは、市教研は我々の自主的な学びの場であり、大会はその学び合いができる機会だということだった。子供たちの学びために創造性を発揮できる視聴覚教育の研究が、今後も継続され、更に発展していくことを願っている。

特集 新たな試みへ挑み、実施する研究大会

多様な他者との協働を通して、自己有用感を高める特別活動 ～第49回宮城県小学校特別活動研究協議大会仙台市大会を振り返って～

特別活動研究部会 会長 勢藤 芳弘 (四郎丸小学校)

1 はじめに

令和5年11月22日(水)、第49回宮城県小学校特別活動研究協議大会仙台市大会が、生涯学習支援センターを会場として開催された。今年度は、新型コロナウイルス感染症が5類相当となり、参集は可能となったが、この時期なかなか会場まで足を運ぶことが難しい宮城県内遠方の先生方に、少しでも参加しやすい形を模索し、ハイブリッド方式とした。

本大会の研究テーマは、「多様な他者との協働を通して、自己有用感を高める特別活動」であり、宮城県教育事務所ごと、領域別の実践発表をしていた第1部と、仙台市から、若い先生方向けに学級経営にすぐに役立つ様々な手法を提案するパワーアップ講座の第2部に分けて行った。

2 領域別分科会の内容

○学級活動(上学年)

大崎市立鹿島台小学校 教諭 伏見 紗知

○学級活動(下学年)

東松島市立大塩小学校 教諭 土井 浩孝

○児童会活動

富谷市立成田東小学校 教諭 大宮 彩希

○クラブ活動

角田市立北郷小学校 教諭 山口 凌・吉村 愛

○学校行事

登米市立米谷小学校 教諭 佐藤 理英

宮城県内各小学校の特色ある実践発表を聞くことができ、どの発表においても、子供たちが関わり合い、認め合い、そして、自己有用感を感じていく姿を捉えることができた。



3 パワーアップ講座の内容

○パワーアップ講座1

「学級会×ICT」

仙台市立蒲町小学校 教諭 九嶋 俊輔

「ミニゲーム」

仙台市立馬場小学校 教諭 齋藤 あずさ

○パワーアップ講座2

「学級づくり×ICT」

仙台市立西多賀小学校 教諭 森川 彰

「学級づくり×アクティビティ」

仙台市立沖野東小学校 教諭 高橋 雄喜

○パワーアップ講座3

「当番活動」

仙台市立北中山小学校 教諭 藤井 雅美

「係活動」

仙台市立新田小学校 教諭 谷地田 和平

若い先生方が、学級経営に苦勞している姿は、宮城県も仙台市も同様である。仙台市内の力のある先生方から、様々な角度から学級経営力向上の手立てを紹介していただき、参加者は、多くのお土産を持ち帰ることとなった。



4 おわりに

海外各国に比べ、日本の若者の自己肯定感がとても低いことは周知の事実である。また、それが、様々な社会問題にもつながっている。だからこそ、児童期に学校や地域において多様な人と関わり、自己有用感を高めていくことは、重要である。

多忙化解消が叫ばれる学校においては、まず始めに簡略化する候補となりがちな特別活動だが、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」を目的とする特別活動こそ、今一度、その重要性を見つめ直し、効果的に実践していくべきだと考える。今後も、本大会の成果や課題を生かし、多様な他者と協働し、自己有用感を高める特別活動の在り方について研究を進めていきたい。

座談会

「仙台版コミュニティ・スクールの
今後の可能性について」

●とき 令和5年10月17日(火) ●ところ 仙台市教育センター

【挨拶】鎌田会長

小学校長会の座談会において、コミュニティ・スクール（以下CS）をテーマとして取り上げるのは、令和3年度、令和4年度に続いて3年目となります。



令和3年度は、「CSの導入のねらいや今後の方向性について」をテーマに座談会が行われました。学びの連携推進室の多賀野室長（現榴岡小校長）に、仙台版CSの考え方について御説明していただきました。その後、CSの立ち上げまでの流れや、CSの持つ可能性について先進校の取組を学びました。

令和4年度は、「仙台版CSの運営の実際と課題」をテーマに座談会が行われました。学びの連携推進室の蓮沼室長（現教育人事部参事）から、CS全校導入への期待と今後の展開についてお話しいただきました。その後、CS先進校の校長先生方から「運営の実際と課題」について話していただきました。

今年、令和5年度のテーマは、「仙台版CSの今後の可能性」についてです。

全ての市立学校に学校運営協議会（以下協議会）が立ち上がった今年度は、「今後の可能性」について話を深めてまいりたいと思います。

CSは、平成29年の「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正により、協議会の設置が各教育委員会の努力義務化されたことで、導入数が飛躍的に増加しました。

その後、新型コロナウイルス感染症の影響が大きくあり、学校は3年間にわたって地域との関わりが持ちにくい期間がありました。今年5月8日に、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行されたことから、今後、一層学校と地域との関わりが深ま

り、協議会による活発な話合いが期待されているところです。

小学校長会では、「開かれた学校経営」の実現を通して、未来を担う子供たちの成長を地域全体で支えていくため、CSと地域学校協働活動の一体的推進による学校運営や、対話と信頼に基づく学校運営の実現が、大変重要であると考えています。各学校においては、校長のリーダーシップの下、「地域とともに歩む学校づくり」の実践を学校経営方針に位置付けて、様々な広報活動を行いながら取り組んでいるところです。

今年度のテーマである「今後の可能性」についてですが、9月15日に行われた仙台市退職校長会が主催する第43回「仙台の教育を語る会」におきましても、「子どもの育ちにかかわる－学校（園）・家庭・地域の目指すべき連携・協働の在り方－」をテーマにシンポジウムが行われ、CSを核とした連携や協働が大切であることを改めて認識する機会になるとともに、私たち校長に「仙台版CSの今後の可能性」について大きな示唆を頂いたところです。

本日は、仙台市教育委員会より学びの連携推進室の丸山室長においでいただいております。丸山室長は、学びの連携推進室において仙台版CSを推進する要として、常日頃から、私たち校長にたくさんの御助言・御支援を頂いております。本日もどうぞよろしく願いいたします。

結びになりますが、この座談会の実施にあたり広報部長の高橋校長先生、座談会チーフの黒田校長先生に御尽力いただきました。ありがとうございます。そして、お忙しい中、高森小の熊谷校長先生、鶴巻小の前川校長先生、田子小の及川校長先生、鶴巻小の小田校長先生に座談会で取組の発表をしていただきますことに心から感謝を申し上げ、挨拶といたし

<出席者>

丸山 淳

(仙台市教育委員会
学びの連携推進室長)

鎌田 康彦

(仙台市小学校長会会長
仙台市立上杉山通小学校長)

小田 暁

(仙台市立鶴巻小学校長)

前川 武則

(仙台市立鶴巻小学校長)

及川 悦彰

(仙台市立田子小学校長)

熊谷 礼子

(仙台市立高森小学校長)

高橋 和之

(仙台市小学校長会広報部長
仙台市立錦ヶ丘小学校長)

司会

黒田 章博

(仙台市小学校長会広報部
仙台市立柳生小学校長)

ます。

皆様、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

高橋広報部長

仙台市小学校長会・広報部では、今年度のテーマを「社会の大きな変化と今日的課題への対応をとoshi、未来を切り開く児童を育む学校経営」とし、会報「廣瀬川」の編集を進めております。



さて、今回の座談会における柱は、昨年度に続き、仙台版CSについてです。昨年度の座談会では、CS運営の実際や、CS導入後の課題と感じているところなどについて、先進校の取組を紹介いただきました。そこで今回は、いよいよ今年度から市内全ての学校で、仙台版CS導入・設置となりますことから、「仙台版CSの今後の可能性」をテーマに、お話を伺いたいと思います。

進行に際して、まずは、仙台版CSの「今後の可能性」について、本事業を担当されております、教育局学びの連携推進室の丸山室長より、お話を頂きたいと存じます。

それを受けまして、「仙台版CSの各校における運営の実際と今後の可能性」について、既にCSを導入し、何度か協議会を重ねられ、様々な取組を実践されている先進校の校長先生方からお話を伺いたいと思います。

地域総ぐるみでの教育の実現のため、各校における「協議会における熟議の実際や、校長として大切にしていることなども含め、仙台版CSの今後の可能性」などについて、先進校の校長の立場から、御示唆を得たいと考えております。

以上のように、御出席の皆様には、これまでの実践やお考えについて御紹介いただき、今後、私たちが取り組んでいくための指針にしたいと思います。

丸山室長

◆「仙台版コミュニティ・スクール」の全校導入に伴う各校の状況と期待する展開、可能性について
令和2年度から導入を進めてきた仙台版コミュニティ・スクール(以下CS)は、令和5年4月時点で、市内188校・1園で151協議会(単独設置121協議会、2校で設置23協議会、3校で設置6協議会、4校で設置1協議会)、全ての市立学校・園で導入となっています。このように当初の計画どおりに、素早く導入が進んだのは、校長先生方のリーダーシップのおかげと感謝しております。この場をお借りして、御礼申し上げます。



校長先生方には、御理解いただいているとおり、協議会を設置している学校をCSと言います。子供に関わる方々を協議会委員として、校長先生方の推薦の下、教育委員会で委嘱しています。現在1510名の委員を委嘱しています。協議会では、学校と地域で「ともにどんな子供を育てたいのか」などの、熟議(熟慮と議論)を通して、話し合いながら方向性を一つにしていく中で、目標やビジョンを共有し、実現に向けて協力体制を構築していくものです。本市では、協議会と本市の強みである学校支援地域本部との連携・協働によりCSを推進する体制をつくり、仙台版CSとしています。この体制により、これまで本市で進めてきた「地域とともに歩む学校づくり」が、一層進むものと考えております。

さて、4月に行われた全国学力・学習状況調査に

おける学校質問紙の回答結果から、家庭や地域との連携等に関する項目で、教育課程の趣旨について、「家庭や地域との共有を図る取組を行っていますか」に肯定的に回答した割合は本市の小学校では93.2%で全国より+6.5、中学校では90.7%で全国より+7.5と、家庭・地域との共有する取組が進んでいることが見えてきています。また、「CSや地域学校協働活動等の取組によって、学校と地域や保護者の相互理解は深まりましたか」に肯定的に回答した割合は本市の小学校では94.9%で全国より+8.8、中学校では93.8%で全国より+14.5と、CSの取組が進んできていると考えております。

しかし、本市のCSはまだまだ始まったばかり、大切なのはこれからであり、持続可能な仕組みに成長させていくことが大切であると考えております。そのために、教育委員会といたしましても、より良い取組にしていくために、伴走的な支援が必要であると考えております。

今年度4月から学びの連携推進室にCSアドバイザーを配置し、各校を訪問し、校長先生方や委員の皆さんからヒアリングを行い、現状把握と成果や課題の共有を行っているところです。CSアドバイザーは、各校の要望に応じ、相談に乗るだけでなく、要請いただければ協議会に参加し、研修や熟議のファシリテーターを行います。是非御活用ください。

また、協議会委員に対する研修の充実を図るため、CS・ミーティングを年2回開催します。研修を行うことで協議会運営へ理解の促進を図ってまいります。さらに、各協議会の会長さんの横のつながりをつくることも目的としており、先進事例、好事例の共有につながることを期待しています。

本日の座談会が良い学びの時間になることを期待しております。

司会<黒田>

それでは、一つ目の視点「これまでのCSの運営の実際」につきまして、発表者の皆様からお話を伺ってまいります。

1 コミュニティ・スクールの運営の実際

小田校長

本校では令和4年7月1日に協議会が設置されました。会長は学校支援地域本部「つるっこ」のスーパーバイザー（以下SV）でして、委員はPTA会長や連合町内会会長、学区内の幼稚園、市民センター、児童館館長。社会学級委員や民生委員にも委嘱しています。昨年度は協議会を2回開催し、実際に子供たちが学ぶ姿を見ていただいたり、学校運営に関して説明したり御意見をいただいたりしました。



協議会の中で、委員の皆さんから議題として出され、特に熱心に協議していただいたのは「地域防犯」についてです。鶴ヶ谷地区ではこれまで約20年間、子供たちの安全を地域全体で見守る「見守るゾウさん運動」を行ってきました。それがコロナ禍の影響もあって運動が下火となり、特に若い保護者からは看板やステッカーなどを見ても、どんな運動であるのか認識されなくなってきました。一方で地域では以前と変わらず不審者情報が頻出しており、協議会が働き掛けて、この運動を再び活性化させよう、と決まりました。

その後、協議委員は自ら市民センター祭りに参加し、ブースを設けてティッシュ配りを行ったり、CSだよりを発行したりして、見守るゾウさん運動の認知度を高め、地区の小中学校において、この運動を再度活性化させていこうとする機運を高めることができました。

児童の校地外における安全確保は、安定した学校運営に欠かせないものです。校長として協議会のこのような主体的な活動は、大変すばらしく、また心強いと感じているところです。

前川校長

CSを運営するに当たって、どんなメンバーで構成されているかによって、その方向性や実際の運営の効果が大きく変わってくるのではないかと思います。そこで、最初に本校のCSのメンバー構成について

てお話ししたいと思います。

本校の協議会は、私が本校に校長として着任した令和3年度の立ち上げとなりました。

委員の人選に当たっては、学びの連携推進室や既にCSを立ち上げていた学校のアドバイスを基に、立ち上げ時の委員は、人数を広げ過ぎず、コアなメンバーを選んできていくことにしました。具体的な候補者を挙げていく際には、地域に根ざしており、学校図書事務もしてくださっている学校支援地域本部SVの方と、これまでも学校に多くの協力を頂いている地域企業の代表の方のお二人に相談して行いました。協議会委員の候補者としては、「子供と接点があり、子供の様子を知っている方であること」「日頃から学校との関わりがあること」を原則としました。鶴巻小学区の特徴として、良くも悪くも地域のしがらみが少ないことが功奏して、協議会委員の選考にはさほど苦勞をしませんでした。

最終的にメンバーとしてお願いしたのは、前述の地域企業の代表の方を会長、学校支援地域本部のSVの方を副会長、協議会委員として、もう一人の学校支援地域本部のSV、学校行事等に様々な協力をいただいている町内会長、児童館館長、民生委員、放課後子供教室コーディネーター、PTA会長の計8名でスタートしました。

このメンバーの方々は、これまでのCSでの話合いや具体的な活動でも、学校の意図や必要に応じて協力をしてくださっています。学校と地域をつなぐCSを運営していく上で、「学校と同じ目標やビジョンを共有できる良いチームであること」は、本当に有り難く、大切なことだと感じています。

協議会の開催は、年3回を計画しています。そのうち年度末(2月)は、次年度の学校運営の基本方針についての「意見・承認」の場とし、残りの2回を「熟議」に充てています。これまでの「熟議」は、その時期の学校の課題や必要性などを勘案して、会長・副会長と事前に相談しながら内容を考えてきました。それらについて、簡単に御紹介いたします。

最初に行った熟議は、「地域の力をどう子供たちの教育に生かすか～学校と地域が一緒にできること



は?～」というテーマで行いました。コロナ禍前は、町内会や地域でも子供たちと関わりを持っていたが、最近では、なかなか子供と関わるということがないという問題意識から、このテーマが選ばれました。委員の方々に自由に付箋に記入していただき、自分の意見を発表しながら、KJ法を使って、分類していきました。「地域の方のマンパワーを生かしての学び」「学校の授業への協力」「環境緑化」「異世代交流」など様々な前向きな意見が多く出されました。

この熟議の内容を学校に持ち帰り、教職員全員と共有しました。さらに、各学年で、「これ」は年間指導計画の「ここ」で取り入れられそうだという内容をピックアップしてもらいました。

この教職員に意見をもらったものを基に、次の熟議では、「地域の力をどう子供たちの教育に生かすかパート2～学校と地域が一緒にできることは?～」というテーマで、話合いを持ちました。模造紙に、教職員が取り入れられそうと考えた項目にシールを付けてもらっていたので、シールの多さやその内容から、学校の希望する方向性を共有することができました。この話合いでは、「子供たちと夢を語り合いたい」という内容に絞られ、6年生の総合的な学習の時間と関連付けて、取組を計画することになりました。そして実現したのが、「生き方いろいろ未来塾～『夢』への一步を踏み出そうプロジェクト～」です。CSのメンバーの方を始め、CSの委員長の声掛けで、仙台銀行、テニススクールコーチ、ベガルタ仙台コーチ、税理士、社労士など様々な職種や立場の方をゲストティーチャーにお招きして、お話を伺いました。ゲストティーチャーの皆さんからは、自分の生き方を伝えるだけでなく、子供たちの夢や考えに触れることができ、貴重な経験だったとの感想をいただきました。

今年度9月のCSの熟議のテーマは、「協働型学校評価重点目標について」でした。これまでの協働型学校評価重点目標は、子供たちの姿や達成状況から教職員の意見を参考にしながら、校長が設定していました。今回、熟議をこのテーマにしたのは、令和6年度の重点目標を設定するにあたって、CSの委員の方の御意見も参考にし、地域・学校・保護者の三者が今目指す方向性は何なのかを知りたいと考え

たからです。委員の方々からは、「相手に伝える力の大切さ」「いじめのない思いやりのある子供」「最後までやり抜く力の大切さ」など様々な意見が出されました。この意見を職員とも共有しながら、次年度の重点目標を設定する予定です。CSの委員の方に学校や子供たち、学校の取組について知っていただくための内容も行いました。

熟議でのフリートークの中で、「実際に子供たちが活動している様子や先生方の取組について知りたい」という声が上がったからです。最初の取組は、ふだんの授業を参観していただきました。学校関係者評価委員会を開催していたときには、授業参観で学級の様子を見ていただいていたのですが、CSになってからは、直接触れ合うことがなかったので、委員の方々も喜んでいました。

また、本校では、自己有用感を高めるために「リーダー・イン・ミー」の取組を行っていますが、この取組についての勉強会も行いました。「七つの習慣」という考えを基に企業研修を行っている団体から、ノウハウを教えていただきながら、取り組んでいるのですが、その団体から講師をお招きして、ワークショップなどの研修を行いました。委員の方々からは、「学校でどんなことを取り組んでいるのか」「どんなことを大切にしているのか」が分かってとても勉強になったという感想を頂きました。

また、別の機会では、「学校の先生ってどんな仕事？」というテーマで、教員と委員の方との交流を持ちました。「教務主任」「学年担任と学年主任」「担任外の7年生」「新任の教員」など学校での仕事について各担当から話してもらいました。「学校の先生って大変な仕事だと聞いていたけど、本当にいろいろなことをしているんだね」と労いのお言葉を頂きました。

これまでにお話したCSの取組を実施する上で、校長として大切にしたいことは、二つです。一つ目は、CSの運営をできるだけ委員会に任せ、学校、特に教頭の負担を減らせるようにしました。まだ、開催回数が少なく、全てを任せることはできていませんが、会長、副会長と連携しながら、案内や当日の運営などをお願いし、自主的な運営ができるようにしたいと考えています。

二つ目は、CSと学校の関係性です。CSのテーマを選んだり、熟議等の話し合いをしたりする際には、校長が、委員に対し、子供たちをどのような方針で育てていくのかというビジョンを示し、意識や取組の方向性の共有を図ることが大切だと考えています。また、委員の方々には、学校と共に責任感を持って行動するという当事者意識を持ってもらうことも大切にしています。

及川校長

着任して間もない4月初旬、会長さんが、校長室に来校し「子供たちに、ふるさと田子のよさを知ってもらいたい。」「CSを立ち上げ、ワクワクする活動にしていきたい。」と、お話しされました。



協議会委員（7名）の皆さんは、学校を核とした地域づくりを進め、学校と関わっていきたくと話されていたことが印象深く、心に残っています。そのお話を伺い、私は「地域と共に歩む学校づくり」の意味深さを実感し、この思いに応える学校経営や、対話と信頼に基づく学校運営の実現が大変重要であると認識しました。

令和5年度のCSの活動は、入学式における保護者や地域の皆様へのCSの立ち上げとCS委員の紹介から始まりました。次に、CS委員の皆さんの提案で、顔写真入りの広報誌を作成し、保護者や地域へ配付しました。4月の授業参観の際には、体育館でPTAトークカフェを行い、PTA活動の紹介とCSとは何か、CS委員の皆さんが、主体的、積極的に活動し、保護者の理解促進を図る機会をつくっていただきました。

その後、CSは、年3回の協議会に向けて、毎月例会として、学校教育の課題や学校の実情に応じた取組について情報を共有し、地域ができる支援内容を検討してきました。活動の取り掛かりとして、私が今年度の学校経営の重点事項として取り上げている「食育の推進」を受け、田子地区の農家で育てられた野菜を給食に提供し、地元野菜の食育を進めることで、地域のよさを知り、地域の方々と関係づくりを進めようということになりました。また、学校の

花壇の除草作業、ビオトープの維持管理など、学校では手が行き届かない教育環境の整備についても話し合いが進みました。時には「CSとしての活動が、学校や先生方が目指す思いや方向と異なっているのは、協議会の本来の役目が果たせないのでは」と話し合われることもありました。そこで、CS委員の皆さんから「先生方の考えや思いを知りたい」という意見を頂き、教職員全員とCS委員の熟議の場を、夏休みに設定することにしました。

校長としては、教職員が主体的に学校運営に参画してもらいたいという思いがあり、職員会議では、「地域とともに歩む学校づくり」「社会に開かれた教育課程」について学校経営ビジョンを伝え、理解を求めていました。私は、学校にとって、絶好の機会と捉えて熟議の場を設定しました。そして、CS委員の皆さんと、熟議の柱立てや進め方、役割分担について話し合いました。

夏休みには、教職員とCS委員の熟議の場を持つことができ、「CSに期待すること」と題して、まずは教職員の願いや思いを収集しました。次に、「CSができること」と題して、解決策の提案を話し合いました。私は、熟議を通して、学校教育の課題や改善に向けて、未来に向けた構想や魅力ある取組を話し合うことができたと思いました。また、教職員一人一人が、子供をど真ん中において、今後の学校運営について、地域の方と笑顔で生き生きと主体的に語り合う姿を見て、とてもうれしくなりました。

CSの運営は、教職員以外の立場にある委員の皆さんの理解と協力を得ながら、熟議を積み重ねることで機能するのだと実感するとともに、教職員の主体的な学校運営の参画にも効果があると思いました。

今後は、この効果を生かしながら、具体的取組、そして成果につなげ、田子小学校の教育活動の発展と、地域コミュニティの活性化に向けて、学校と地域が連携協働していく仕組みづくりを進めていきたいと思いました。

熊谷校長

現在校に着任したときは既に協議会が発足し一年が経過していました。自分が新たに着任し組織に加わる側なので緊張しました。前任校では立ち上げが

まだだったので、生みの苦しみを経験しないまま、既に走り出している協議会の校長になり正直複雑な心境でした。本校では2月始まりの年間6回の協議会を設定しています。1分間の砂時計を使った熟議のスタイル「しゃべっ亭」も定着していましたが、毎回どんなテーマで交流をするか悩みますが、皆さんに尋ねてみたいこと、意見を伺いたいことなどを自由に案を出せるのが楽しくもありました。

ただ、まだまだ、学校側が協議会の案内文書を送ったり協議会の司会進行をしたりしているので、今後は会計も含め事務局的な仕事を協議会委員の方々に担っていただけるシステムが確立すると学校の負担も小さくなると思います。

協議会の開催が近くなると、会長と副会長、校長、教頭の四者で集まり、コア会議を開きます。熟議のテーマ決定から、どの学年を熟議に関わらせるか吟味します。熟議については極力学校経営に生かせる内容にしています。昨年度は学校教育目標の重点目標に関わるテーマについて、今年は学校図書館運営モデル校になっているということもあり、皆さんに「おすすめしたい本」を持参していただき読書活動に関連させました。

また、昨年度は協議会委員の一員で連合町内会の会長さんが、もっともっと今の学校の課題や現状を知りたいとお話ししていたので、授業参観ではなく授業に参加していただく機会を設けました。Chromebookを使っての令和の授業スタイルに会長さんはじめ皆さん衝撃を受けていました。

協議会の方から出された意見で、子供のより良い姿につながる場合は、できる限り生かしたいと考えています。例えば、こんなことがありました。協議会委員と児童が交流をする場面で、子供たちの発表の仕方が気になった委員の方がいました。授業中の発言内容も含め、私も同じことを感じていたので、「自信を持って自分の考えを発表できる児童」をイメージし、次年度の目指す子供像に反映させました。また、すぐにできることとして学習スタンダードを強化し、関連する部分を職員全員で共有しました。



小さなことであっても、協議会委員の方から寄せられた意見で、子供のより良い成長につながるものは真摯に受け止め教育活動に反映させていきたいと考えます。

司会<黒田>

では次に、二つ目の視点「CSの今後の可能性」について、今お考えになられていることをお話してください。

2 コミュニティ・スクールの今後の可能性

小田校長

今年度、本校では協議会の委員の皆さんに5・6年生の授業に関わってほしいと考えています。具体的には5年生の「わたしたちの生活と環境」、6年生の国語「まちの未来」などの授業において、「地域の今と昔をよく知る情報提供者」として参加してもらい、子供たちの意見を聞いたり、発表に対して助言したりしてもらうことを計画しています。

協議会の委員の皆さんは、育みたい子供の姿を共に考える仲間である、とも言えると思います。目標やビジョンを共有するだけでなく、実際に授業に入ってもらい、子供たちの指導に関わっていただくことで、児童の実態の確かな把握と、その実態に応じたより具体的な目標を考えることができると期待しているところです。

協議会の今後について、私は「この協議会がしっかりと認知されること」が大切であると思います。多くの保護者、地域の方から認知され、「今年の協議会ではどんなことが話し合われたのか」などに関心を持ってもらえるものを目指すことは、結果として協議会の機能の充実や可能性を広げることにつながると考えるからです。

本校の協議会は昨年度、「見守るゾウさん運動」や「コミスクだより」を通して、その認知度は高まりつつあります。「承認」「意見」「評価」の三つの機能を柱としつつ、児童や保護者、地域と関わり、その協議会ならではの特色ある取組や活動を大切にすることが、協議会の今後の鍵になるのではないかと考えています。

前川校長

本校でも、不登校傾向の児童や配慮が必要な児童がおり、児童の居場所として、別室を設置して、不登校担当が主として運営し、担任や7学年がサポートをしています。ただ、そうした児童は、増加傾向にある上に、個別に対応する必要があるため、慢性的に人材不足の状態です。CSの活動や人材の輪が広がることによって、教職員の負担を減らし、児童へのより良い対応ができるようになればよいと考えています。

教頭をはじめ、教職員の負担になっているのが、保護者や地域からの「過度の」要求や苦情です。中には、本来的には学校が対応すべき内容ではないのではないかと思われるものも多い現状です。

CSの機能として、第三者の立場で、対応してもらえるようなシステムが構築できると学校の負担が大きく減るのではないかと思います。

本校だけでなく、仙台市全体でも地域の結び付きが弱まってきている傾向にあります。本校では、子供会も存続できないといった訴えもあるほどです。また、子育てに困っても誰にも相談することのできない保護者がいたり、ヤングケアラーの傾向があり、学校になかなか登校できない児童がいたり学校だけでは、解決できない問題が山積しています。こうした現状を見たとき、CSの取組が、学校と委員の間にとどまるのではなく、CSの委員の一人一人が、地域とのコーディネーター役として、地域や保護者とつながり、正に「学校を中心にして地域で子供を育てる」というような環境が整っていくとより良い学校教育ができるのではないかと思います。

及川校長

教職員とCS委員の熟議の場で、教職員が「CSに期待すること」として、「見守り」が一番多く、解決策の提案では、PTAや、地域ボランティア等のマンパワーを必要としている意見が多く挙げられました。下校時や放課後の見守りが手薄で、放課後の学習支援、交通事故防止、不審者との遭遇や、友達同士のトラブルが生じないように、見守り等の支援が欲しいという話合いになりました。

今回、教職員とCS委員の皆さんと熟議を行ったこ

とで、教育活動の課題や改善に向けた提案ができ、教職員自らが、自分の気付きを表出し、学校全体が、CS委員の皆さんや地域に、学校の現状や願いを、対話を通して「開く」ことができたと考えています。今後、CSの機能を生かし、校外学習や体験活動を含めて、地域の方々に、ボランティアやゲストティーチャーとして関わっていただく機会をつくり、「開く」から「つながる」取組の推進を図りたいと考えています。

その一助になればと思い、私は、地域の夏祭りや地域防災訓練の会合に参加したり、学区民運動会の運営に協力したりして、自治町内会長さんとの交流を図りました。また、中学校区の「かけこみ110番」に協力いただいている会社や商店、個人宅に足を運び、協力をお願いしました。地域巡りを行い、分かったことは、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響で、参集型の地域行事を数年ぶりに再開するであったり、つながりが失われていたりしている現状です。特に、子供会への入会率の低下が著しく、町内会費の納入ですら断る家庭も増えていることが分かりました。連合町内会長さんからは、「焦らず、時間を掛けて、無理のない活動を継続していきましょう。学校には協力していきますよ。」とのお話を頂きました。

私は、連合町内会長さんの話を受けて、改めて「共に歩む」ことの必要性を痛感しました。校長として、CSの今後の可能性は、「地域総ぐるみでの教育」を実現するための重要な役割があると考えます。私は、これまでこの機能を生かす舵取り役として、校長の果たす使命は大きいと感じていました。しかし、CSにおいて、学校運営について熟議し、共に責任を持ち、それぞれの立場でできることを進めていくこと、持続可能な活動にしていくこと、CSは、子供の学びを支え、地域とつなげる最大の応援団であると思い、心強く感じました。

田子小学校のCSは、「開く」から「つながる」段階にあります。今後、更なる熟議を通して「共に歩む」を目指していきたいと思っています。

田子小学校のCSの活動は始まったばかり。しかし、私は、子供たちや地域に新たな変化をもたらしていく予感を感じています。教育活動の中に、子供

たちが学校外の大人や社会と関わり、地域から発見を得ることで、子供たちの学習意欲が高まり、自分のふるさとのよさを実感する学びの循環をつくりたいと考えています。そこで、子供たちによって、学び得たものを地域に発信したり、自分たちにできる貢献活動に取り組んだりすることで、地域の人が元気になる、喜んでくれる恩返しができないかと思っています。そんな「地域と共に発展していく学校づくり」を進めていきたいと考えています。そして、CSの新たな可能性が広がるように実践していきたいと思っています。

熊谷校長

学校にはPTAや子供会育成会、社会学級、体育振興会など、子供や保護者に関わる諸団体がたくさんあります。それぞれが児童の成長や健全育成につながる活動をしていますので、協議会が中心となることでCSとしての顔の見える関係のパイプを強化できると思います。

年に6回、2時間程度ではありますが、14人が集まること自体とても意味があると思います。熟議は結論に至らなくても回を重ねるごとにメンバーの心理的な距離感が小さくなります。そうしているうちに、学校の中での困り事や課題についても自然に相談できるようになります。何をすることも説明責任が問われる時代ですが、学校として大きな決断を迫られる場合、協議会の場で多角的・多面的に意見を頂くことで解決の糸口が見えることもあります。また、委員の方々も学校の抱える課題を共有することで少しでも役に立ちたいというスタンスでいてください。

少子高齢化の波が押し寄せ、児童数の減少でPTAをはじめ学校ボランティアの活力が弱くなっているところもあります。仕事を持った保護者も多く、PTA活動や子供会育成会、社会学級など、マンパワー不足で活動が停滞しているところもあります。このような状況下では学校の担うべき役割が逆に大きくなることも心配されます。しかし、そんなとき、足腰の強いCSが展開されていれば、たとえ諸団体の活動にでこぼこがあっても、CSがその活動を補完できるかもしれません。せっかくできたCSという組織

は名実ともに学校を支える組織であってほしいと思います。

これからも、大震災や新たな感染症の流行、地球温暖化による気候変動をはじめ、想定外の課題が学校にも降り懸かるかもしれません。しかしながら、「子供のよりよい育ち」を目標に地域と保護者と学校の三者が一体となって、子供のために手を携えていけば、こんなに心強いことはありません。大きな打ち上げ花火など打ち上げなくても、そのことを心に留めてCSを育ててほしいと思います。最後は地域ぐるみの人材育成なのではないでしょうか。

【総括】鎌田会長

本日は、学びの連携推進室丸山淳室長から、CSを持続可能な仕組みに成長させていくために教育委員会が今後も伴走的な支援をしていきたいというとても心強い発言を頂きました。また、鶴谷小の小田校長先生、鶴巻小の前川校長先生、田子小の及川校長先生、高森小の熊谷校長先生に貴重な話題提供をしていただきました。誠にありがとうございます。



さて、始めの挨拶の中で、小学校長会の座談会でCSを取り上げるのは、今年で3年目であることを話しました。今回の座談会に参加するにあたり、改めて一昨年、昨年の「廣瀬川」を読み返してみました。

「CSの導入のねらいや今後の方向性」について話し合われた令和3年度は、白井会長が、そのことについて次の三つのキーワードで総括しています。それは、「共有」「熟議」「魅力」の三つのキーワードです。学校、地域、家庭が、「育みたい子供の具体的な姿」を「共有」することが必要であること。自主的・実践的な話し合いを重ねて生み出す「熟議」が大切であること。CSは、教職員、地域住民、保護者、子供たちにとっても「魅力」あるものでなければならない、と総括していました。

「仙台版CSの運営の実際と課題」について話し合われた令和4年度は、田辺会長が、そのことについて三つの内容で総括していました。一つ目が、校長先生方の信念の下に学校運営の基本方針を打ち出す

とともに、子供たちの実態や課題をしっかりと把握すること。二つ目は、学校づくりのパートナーを増やすこと、また、コーディネーターの役割を配置することです。三つ目が、共有と共感が必要だ、と総括していました。

そして、令和5年度です。今年度は「今後の可能性」について、話し合いを行いました。

今年度の一つ目の視点「これまでのCSの運営の実際」では、鶴谷小の小田校長先生から、協議会が自ら市民センター祭りに参加して広報のためにブースをつくった、また、CSだよりを発行したというお話がありました。鶴巻小の前川校長先生からは、CSの取組を実施する上で校長として大切にしていることは、運営をできるだけ協議会に任せること、そして、協議会委員の方々に、当事者意識を持ってもらうことを大切にしているというお話がありました。田子小の及川校長先生からは、着任して間もなく、会長さんからCSへの思いを伺ったという話を頂きました。高森小の熊谷校長先生からは、会長さんに授業参観ではなく、授業に参加するという取組を行ったというお話がありました。

いずれの取組も、協議会及び協議会委員の皆様の「主体的・自主的な取組」であり、まさしく丸山室長が冒頭にお話ししていた「持続可能な仕組み」づくりに結び付くことと考えています。協議会委員と校長の学校経営の理念、方針等を共有し、協議会の「主体的・自主的な取組」を推進していくことが、今後、「持続可能な仕組み」に大きく結び付くものと考えています。このことによって、協議会の活性化が促進されるとともに、学校の教職員の負担あるいは負担感を軽減することに結び付くものと考えているところです。

次に、二つ目の視点「CSの今後の可能性」についてです。鶴谷小の小田校長先生から、協議会の委員が授業づくりに参加し、子供たちの指導に関わっていただくことを考えているというお話を頂きました。鶴巻小の前川校長先生からは、CSの活動や人材の輪が広がることによって、個別の対応など児童へのより良い対応ができないか考えているというお話を頂きました。田子小の及川校長先生からも、教職員のCSへの期待としては、児童への「見守り」への

期待が大きいというお話を頂きました。高森小の熊谷校長先生からは、地域諸団体がマンパワー不足で活力が弱くなっているように感じるため、CSが学校を支えてほしいという熱い思いをお聞きしました。

4人の校長先生方からは、「CSの今後の可能性」、そして、CSに校長が期待することというようなお話をしていただいたと思っています。

昭和時代に団地が開発されて成熟した地域の中にある学校、令和の時代にあって、宅地やマンションの開発が著しい地域にある学校、中山間地にある学校、市街地に位置する学校など、環境の異なる様々な学校があります。私たち校長は、学校が抱える様々な課題は、地域が抱える課題にも通じることを認識しつつ、それぞれの学校、協議会、地域の課題に対応した取組が求められており、そのことが、「CSの今後の可能性」ではないかと、本日の座談会に参加して考えたところです。

結びになりますが、今後も小学校長会では、仙台市教育委員会の御支援の下、共に、仙台版CSの推進に努めていくことを申し上げ、私からの総括といたします。

この後、丸山室長からまとめのお話を頂き、座談会を締めくくっていただきたいと存じます。

皆様、本日はお忙しいところありがとうございました。

【まとめ】丸山室長

事例紹介をいただいた4校の校長先生方、具体的に、素晴らしい取組と今後の可能性をお話いただき、本当にありがとうございました。私自身も大変勉強になりました。仙台版CSの取組で、学校づくりや学校課題の改善に向けた実践が進んでいることを、大変心強く感じております。

事例紹介では、鶴谷小学校の小田校長先生から、「協議会での議論が、これまで行ってきた活動の活性化につながっている」とお話しいただきました。正に、地域課題を的確に把握し、これまで育ててきた「地域の宝」を生かした取組であると感じました。

鶴巻小学校の前川校長先生からは、「地域の力をどう子供たちの教育に生かすか」をテーマに、「熟議」を重ね、総合的な学習の時間と関連付けて、プロジェ

クトを実現した地域の力を学校教育に生かす取組は、豊かな学びの環境をつくる、CSの目指すところであると感じました。

田子小学校の及川校長先生からの事例では、CS委員の皆さんから「先生方の考えや思いを知りたい」という意見を頂き、教職員全員とCS委員の交流の場を設定し、熟議を進めました。先生方の生の声を直接聞くことで学校の現状理解につながり、課題を共有をすることは、CS運営にとって大切なことであると考えています。

高森小学校の熊谷校長先生からは、子供たちを交えた話し合い（熟議）を行っているとのことでした。子供と話すということは、子供の様子を理解するだけでなく、「子供の意見」を学校運営に生かすことができるということにつながります。是非、皆さんの学校でも実践していただきたい事例です。

このような子供や学校の目指す姿を、学校・地域・家庭で共有していくことは不可欠なことであり、「未来に向けた構想や魅力ある取組を話し合う場」としていくことがCS運営にとって大事であると考えております。その場に、子供が入ってもいい、先生方が入ってもいい、地域の方々、保護者が入ってもいいと考えています。より多くの様々な人たちの声や意見を取り入れながら、学校運営を行っていくこと、そして、様々な人と協働して子供たちの豊かな学びの環境をつくっていくことが、CSの大きな可能性ではないかと考えます。そうすることで、私たちの目指す「地域ぐるみでの教育」「地域とともに歩む学校」の実現に近付くと考えます。

座談会の最後に私からは、仙台版CSの可能性を開くために、各校で共通に取り組んでいただきたいことについて3点お話しいたします。

1点目は、「発信する・広報する」です。本市のCSは始まったばかり、地域・保護者に協議会の活動を広報することは、子供の様子、学校の状況をお知らせすることにつながると考えています。これは、広報誌の作成だけではありません。委員の皆様は、様々な肩書をお持ちの方々です。様々な集まりの場で、委員それぞれがCSについて、スピーカーとして広報していただくことも、大変有効であると考えます。そうすることで、市民のCSに対する認識が高ま

るとともに、学校に対する理解が深まります。是非お願いしたいと思います。

2点目「熟議（熟慮と議論）を生かす」ことです。協議会は学校運営について話し合うところです。各校において様々なテーマで、熟議を進めていただいております。私自身、「熟議」という言葉はあまり好きではありませんが、これまでの学校の会議体では、不足していた部分であるとも感じます。「よく考えて、意見を出し合う。」そして、話し合った内容の良い点を学校運営に生かしていくことが大事であると考えます。一度の話し合いで結論を出す必要もありません。同じテーマで何度、誰と話し合ってもいいと考えます。全てを生かすことは難しい、その中で「いいとこ取り」をしていくことが重要です。委員が子供と話す、先生方と話す、保護者と話す、地域の方と話す中で、子供をはじめ、様々な方の意見を生かしていくことが、理解を得た、より良い学校運営につながることを考えます。

3点目「持続可能な仕組みを構築」していくことです。前川校長先生から、協議会の委員の皆さんが「学校と同じ目標やビジョンを共有できる良いチームであることは、本当に有り難く、大切なこと」とのお言葉を頂き、強い信頼関係を築いてこられたものと感じていました。学校と協議会委員が、腹を割って話せる関係、頼りになる存在になっていくところこそ、持続可能な仕組みにつながると思います。すぐに、そのような関係は構築できません。話し合いを重ねる中で、次第に価値観が共有され、その方向性が大きく、太くなっていくものと考えます。その方向性の中で、学校・地域・家庭で役割分担をしながら、

協働していくことこそが、大切です。よく、教頭先生から「事務局機能の移行」について検討したいとお話を頂いています。初めに、お話ししましたが、まだまだ、仙台のCSは導入期です。委員の皆さんと信頼関係をつくり、教員の現状を理解していただきながら、徐々に事務局機能の意向を進めていくことをお願いします。

以上3点について、是非実践につなげていただき、CSの可能性を広げていただきたいと思います。

終わりに、CS全国大会の事例紹介を見ると、子供たちのために大きなイベントを行いました等の発表が多く見られます。何か大きなことを成し遂げることがCS目的になっていないかな、子供はどこにいるのかな、と私は感じてしまいます。

それに比べ、本市の協議会に参加すると、「子供を真ん中において」「子供たちの安全・安心のために」「子供と話したい・声を聞きたい」等の言葉が出るたびに、大変うれしくなります。先日、ある学校のPTA会長さんから、主役は小中学生、子供の自主性を尊重し大人がバックアップ、「大人がこれをやりたいというエゴで進めてはだめ」「PTAや学校支援地域本部が先行し過ぎてもだめ」、地域全体を巻き込む仕掛け、雰囲気大切……との言葉を頂きました。

CSは、「学校運営のツール」です。子供を主役に、子供の自主性を大事にしながら、対話と市民との協働による「学校・地域・家庭」三者の信頼関係の構築を行うことで、横と縦の「学びの連携」を進め、「地域とともに歩む学校づくり」の実現に、引き続き御尽力いただきますことを御期待申し上げ、まとめといたします。



各地区から 青葉西地区

本当に必要なことを 大切にする学校に

梶原 智 (愛子小学校)

愛子小学校は、錦ヶ丘団地の開発で児童数が増加したことにより、母体校広瀬小学校から平成21年4月に分離し、仙台市124番目の市立小学校として開校した。仙台市の西部、県道愛子秋保線と国道48号線が交差した所に位置しており、学校南側には御殿山や蕃山などの里山と月山池や斉勝沼があり、学区の北側には清流広瀬川が流れる自然豊かな地域である。開校時の児童数は908人でスタートしたが、その後年々増加を続け、錦ヶ丘小が開校する前年度の平成26年度には約1400人の児童数となる県内一のマンモス校であった。

今年度で開校から15年目を迎える本校であるが、開校当初から改革精神に富んだ教職員、PTA、地域の方々の協働により、独創性豊かな取組を重ねてきている。教職員は、他校ではあまり見られない教育活動や児童会行事を実施したり、開校初年度から現在のICT教育の走りともいえる電子黒板等を用いた表現力育成のための公開研究会に取り組んだりし

た。PTAは、ボランティア制を基本として「やりたいことをやれる人」が「できることをできる時に」という理念でスタートし、他校に見られるような委員会制度は作らずに今日まで活動を続けている。更に地域に目を移すと、愛子小の敷地に隣接している森を子供たちの学びに役立てようと「愛子ハグリッズ」という活動団体を立ち上げ、森の管理や整備、総合的な学習の時間講師などをしていただいている。この「愛子こどもの森」は、多くの学習、教科等で活用しており、本校の教育課程に欠かせない重要なフィールドである。

学校運営協議会の立ち上げも早く、令和2年度にスタートし、愛子の子供たちや学校のためなら労苦を惜しまない方々だけで構成されている。今年度第3期では、挨拶キャンペーンに加え、安全パトロールをスタートしたり、安全マップ作成に取り組んだりした。

開校10周年の記念行事実行委員会の挨拶文には「既成の形にとらわれず、いつも子供を真ん中に、その時本当に大切なものは何かを考えて歩みを進めてきた」とあった。今後もこの精神・風土を守っていききたいと思う。

各地区から 泉西地区

教育目標に込められた 願いとは？

遠藤 浩志 (館小学校)

校舎の窓から泉ヶ岳の季節の変化を臨む館小学校、今年(令和5年)開校36年目を迎えました。

1872年(明治5年)に我が国最初の全国規模の近代教育法令である「学制」が公布されてから、2022年(令和4年)9月4日で150年を迎えたことにあり、今年度、創立150周年を迎えた学校に比べると歴史は、浅いですが、これまで12名の校長が館地区の子供たちの健やかな成長のために様々な教育活動を進めてきました。

本校は、児童数273名(2023/5/1)、学級数13(特別支援学級2学級を含む)と比較的小規模の学校ですが、学校沿革史を見ると、創立10周年を迎えた平成10年には、児童数761名、学級数21という記録があります。

「創造的な知性と豊かな感性をそなえ自主性に富み実践力のあるたくましい児童の育成」という教育

目標が校長室に掲げられています。パンデミックと言われた新型コロナウイルス感染症の世界的な流行やロシアによるウクライナへの侵攻に伴う世界経済の混乱など、予測することが難しい時代を迎えたと言われます。こうした時代に改めて教育目標を読んでもみると、どんな時代でも子供たちがたくましく生きるために必要な大切な力が明記されているように感じました。そして、Society5.0の時代を迎え、様々な情報を自ら取捨選択し、2045年に迎える「シンギュラリティ」の中で人間としてどのように生きるかが問われています。

昭和63年に開校し、平成、令和と三つの時代を歩んできました。その間、地域の皆さんに見守られ育てられた子供たちが、創造的な知性と豊かな感性を武器に、主体的に実践を積み重ね、新しい時代をたくましく歩む人となるよう、日々の教育活動を積み重ねています。私たち教職員は、校長室に飾られている12名の歴代校長に見守られながら、こうした使命に応えていきたいと思えます。

各地区から 若林地区

目指せ“まちのステーション”

曳地 敏明 (大和小学校)

市内52番目の小学校として昭和48年に開校した大和小学校は、先頃50周年記念式典を行い、地域の皆様と共に祝うことができた。2年半前に着任した時からの懸案の一つやり遂げ、安堵しているところである。

着任当時はコロナ対策の真ただ中、完成間近の新校舎を仰ぎ見るプレハブ校舎の校長室を訪れる地域のキーマンと思しき方々が、口々にこうおっしゃったのを覚えている。

「校長先生、そのうちコロナが収まったら校舎落成と50周年をお祝いすっぺしね。」

「何しろ、おらほの地域には神社もお寺もないんだから、学校の役割は大きいんだよね。」

極度に人流が抑制された中であっても地域の方々はまだお学校に期待を寄せ、地域の拠点としての機能を求めていることを痛感した。そこで打ち出したのが“まちのステーション”のキャッチコピーである。「どこかで聞いたことのあるコピーだな。」

先輩校長の激励とも^{やゆ}ともつかぬ言葉が核心を突いている。買い物がなくとも、とりあえず立ち寄ってみるコンビニのように、自然と人々が集まってくるような学校を理想の姿とした。

折しもコミュニティー・スクール設立準備の時。熟議から寄せられた提案をグランドデザインの目玉とすること。それを踏まえた学年のテーマの下、カリキュラム・マネジメントによって、地域の財産を掘り起こすこと。校内研究においても地域との関わりを主題とすること。各施策を一体化したシンプルな学校経営の方針のベクトルは、全て“まちのステーション”の具現化に向いている。

初代校長は「今は何もない大和小、せめてみんなの心の中にシンボルを」と自身が作詞した校歌に「大和の鐘」をしたためた。その後、実際に鐘が作られ、毎朝校庭の一角からその音を鳴り響かせている。そして先の記念式典での挨拶を私はこう結んだ。

「これからも、大和小に関わる全ての皆様の心の中に、大和の鐘を鳴り響かせてまいります。」

式典が終わったからといって安堵などしてはられない。“まちのステーション”は今正に緒に就いたばかりである。

各地区から 太白西地区

恵まれた環境で

吉田 正太郎 (八木山南小学校)

本校がある八木山南団地の造成が昭和50年に終了し、昭和52年4月、八木山小、金剛沢小、上野山小から子供たちが集まり、61番目の仙台市立小学校として、八木山南小学校は開校した。

高台にあるので景色が良く、天気の良い日には太平洋が見える。校舎の裏には治山の森があり鳥のさえずりが聞こえ、自然にも恵まれた環境にある。学区を巡視していると、至る所に森や木々があり緑の豊かさに驚かされる。

西多賀中学校区小中連携事業として西多賀中学校、金剛沢小学校と実施している取組の中から二つの行事を紹介したい。一つ目が落ち葉拾いなどの地域清掃を行う「小中連携クリーン作戦」、二つ目が朝に小中学生が通学路に立って行うあいさつ運動「ハピネスタウン・プロジェクト」である。児童生徒が地域に貢献し、健全に育っていることを感じている。

10月には、児童会発案で「あいさつ運動」を行ったが、挨拶に限らず、自分たちで考え、共に伸びる子供たちが育っている。

そして、PTA活動やボランティア活動が活発で、学校を支えてくださる方々が多いことに心強く感じている。「子供たちのために」という気持ちを強く感じる。

また、年に10回の予定で、本校体育館を会場に体育振興会主催の「体振と遊ぼう会」が開催され、体育振興会の方々が、子供たちと直接関わりながらスポーツに取り組む機会を与えてくださっている。体を動かして遊ぶことが、健康な体づくりや、友達との好ましい関係づくりにつながるということを、経験を通して感じている。体育振興会の活動を通して子供たちの健全な成長のために取り組んでくださっていることを有り難く思う。

令和5年7月には、八木山南連合町内会主催の「八木山南夏祭り大会」が4年ぶりに開催され、大変にぎわっていた。

自然と人に恵まれた学校である。今後も地域・保護者と協働して教育活動を進めていきたい。

研究部から

研究部の活動を振り返って

研究部長 松田 修一(栗生小学校)

1 はじめに

新型コロナウイルス感染症の分類が5類へ移行し、教育活動がコロナ禍前の状況に戻りつつある中、校長会の研究協議会をはじめとした会合は全て参集、対面で行われることとなった。特に、全国連合小学校長会東京大会は、実に四年ぶりに参集しての二日間開催となった。事前に配付されたQRコードにより受付を行ったり、分科会ではテキストマイニングを使って協議内容をまとめたりと、持続可能な大会運営をめざした新たな取組がいくつも取り入れられた大会であった。ほか、東北連合小学校長会研究協議会山形大会、そして、指定都市問題研究協議会浜松大会も現地での開催となった。奇しくもコロナ禍によりオンラインによる会議の可能性、有用性を感じている中、多くの参加者は参集、対面協議のよさを改めて感じているようであった。

仙台市における定例の研究部会も、今年度は、第1回目から教育センターに参集して行うことができた。ここでも、各委員会における研究発表に係る協議や、アンケート調査の詳細な打合せ等について、直接顔を付き合わせて話を進めることができ、参集して行うことのメリットを感じる時間となった。

なお、宮城県の研修部との間で、年2回開催してきた「県市研修部連絡協議会」は、今年度から9月に1回のみで開催となった。限られた時間の中であったが、宮城県、仙台市の研究の概要とその進捗状況、今後の東北連小の発表に向けての確認、そして各地域における課題など、様々な内容について話が出され、充実したものとなった。同時に、改めて、宮城県と連携をしながら、研究等を進めていく必要性を感じた。

以下に今年度研究部が取り組んできた具体的な活動の様子について紹介する。

2 東北連合小学校長会研究協議会山形大会

令和5年7月6日、7日、東北連合小学校長会研究協議会山形大会が開催された。大会主題「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、副題は「人間力

に満ちあふれ 社会や地域の持続的発展に貢献できる子どもを育てる学校経営の推進」である。学校経営について対面で情報交換を行い、校長の果たすべき役割と指導性について考えを深める有意義な機会となった。

初日の全体会では、「ものづくり、ことづくり、そして新型コロナ禍での挑戦」と題し、オリエンタルカーベット株式会社代表取締役社長の渡辺博明氏による記念講演が行われた。「足元からのおもてなし」を掲げ、山形の自然をデザインに取り入れ、独自のブランディングで勝負する揺るぎない覚悟と挑戦、また、常にプラス思考で会社を発展させる経営手腕、ものづくりを支える確かな技術力に裏打ちされた誇りと信念を持って取り組む職人の姿など、引き込まれる話であった。不易と流行をバランスよく取り入れる感覚、豊かな発想力と創造力での挑戦、未来を見据えた人材育成など、現在の学校課題と関連付けながら伺うことができ、多くの示唆を得る講演であった。

二日目は3会場にて、10の分科会が行われた。各分科会では、二つの研究の視点に基づいてそれぞれ発表があり、グループに分かれて協議が行われた。視点に沿った各校での具体的方策、また、校長の役割について話し合われ、東北各県の学校事情や実践について意見交換が行われた。その後、代表が発表を行い、校長の果たすべき役割についてまとめられた。

令和6年度の青森大会では、Ⅱ教育課程第3分科会(知性・創造性)にて、視点「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進」について仙台市が発表を担当する。現在、各校長に「カリキュラム・マネジメント等の取組に関する調査」を行い、それを基に事例校調査をしながら、研究を進めている。

3 指定都市小学校長会研究協議会浜松大会

令和5年11月1日、2日の二日間、第77回指定都市小学校長会研究協議会浜松大会が通常開催された。大会テーマを「将来を展望したより質の高い学校経営を展開し、新しい時代の教育の発展に資する校

長を目指して」とし、東京都及び20の指定都市校長会会員が、グランドホテル浜松に参集し研究協議を行った。

初日は、第1分散会「学校経営上の諸問題」、第2分散会「教育課程編成上の諸問題」、第3分散会「人権教育上の諸問題」、第4分散会「特別支援教育上の諸問題」、第5分散会「生徒指導上の諸問題」、第6分散会「学校・家庭・地域連携上の諸問題」の六つに分かれての協議であった。仙台市は、第2分散会において、幸町小学校の武田芳典校長が「地域の特色を生かした教育課程の編成～地域と連携・協働した教育活動を展開する学校を目指して」と題して発表を行った。アンケート調査の分析結果と仙台市小学校校長会の取組、そして実践例として榴岡小学校と荒巻小学校の取組を紹介した。まとめでは、仙台版コミュニティ・スクールの推進と学校支援地域本部を中心とした支援体制の構築、地域連携担当教諭などの人材育成において校長がリーダーシップを発揮することの大切さについて発表した。初日の後半には、第1部会「キャリア教育」、第2部会「多様性・共生社会」、第3部会「ICT活用」、第4部会「人材育成」、第5部会「コミュニティ・スクール」、第6部会「働き方改革」の六つに分かれて話題別情報交換会が開催され、研究協議、情報交換共に充実した時間を過ごすことができた。初日の夜は、コロナ禍以前のように飲食を伴っての歓迎レセプション交流会が開催された。ジュニアクワイア浜松による合唱が披露され、その後は4年ぶりに歓談を行い、様々な話題で他県の校長たちと交流をすることができた。交流会中に行われたふるさと紹介では、七つの指定都市の校長らが、それぞれ工夫を凝らしたふるさとのよさを紹介した。

2日目は、全体研究会として教育講演が行われた。『戦国武将のリーダーシップ～信長・秀吉・家康に学ぶ経営戦略～』を演題として、静岡大学名誉教授・文学博士の小和田哲男氏の御講演を学校経営という視点から、興味深く拝聴することができた。閉会式では、大会宣言文が採択され、次期開催都市である岡山市の挨拶で締めくくられた。コロナ禍が明け、浜松大会は制限のない通常開催となり情報交換や交流を深めることができ、有意義な大会となった。

4 仙台市小学校長会研究協議会

学校課題委員会では、令和5年11月14日に仙台市教育センターに参集し、研究協議会を開催した。今年度の研究主題「豊かな人材を育成する工夫と校長

のリーダーシップ～教員の資質・能力の向上を目指して～」の下、講演会と調査研究の結果報告、グループワークでの情報交換を行った。

鎌田会長による開会の挨拶に続き、株式会社Palletの代表取締役である羽山暁子さんを講師に招き、演題「質問と共感でWILLを引き出す～コーチング型マネジメントと、心理的安全性の作り方～」で、講演を行っていただいた。講演は、随所にワークショップを取り入れ、和やかな雰囲気を作りつつ、私たちをぐっと引き込む興味深い内容で、あっという間の1時間半であった。続いて、7月に実施した人材育成に関するアンケート調査結果について、鶴巻小学校の前川校長がスライドを使って説明を行った。経験年数で分けた三つのステージ（育成期、向上期、充実・発展期）と、プレ管理職・管理職の各ステージで、校長が教員に身に付けてほしいと思っている力と実際の課題、その時期での人材育成の工夫を説明した。それぞれの時期に求められる資質・能力や、現場で実際目の当たりにしている課題に、深くうなづく姿が多く見られた。その後、グループワークを通して情報共有を行い、講話や説明を聞いて感じ考えたこと、面談の工夫、人材育成で工夫していること、今後取り組んでみたいこと等について、付箋紙等を活用し活発な話し合いを行った。講演や互いの実践の工夫を聞き、今後各校で取り入れていきたいことなどを熱心に話し合う姿が、会場のあちこちで見られた。

石川副会長からは、講師への御礼と共に、学びが多く、とても実りのある会だったと挨拶があり、今年度の研究協議会を盛会のうちに閉じることができた。

5 今後の研究推進に向けて

変化の激しい予測困難な時代。我々校長の情報収集能力の重要性、その情報を基にした決断を求められる場面は年々増してきている。そのため、これまで以上に校長自身が学び続けるという自覚を持たなければならない。また、校長会や研究協議会のように、校長が一堂に会して互いの思いを共有し、学び合い、横の連携を深め合う時間も、より一層大切なものとなってきていると感じているところである。

結びに、今年度も仙台市小学校長会の皆様から、研究部へたくさんの御支援と御協力を頂いたことに、心より感謝申し上げます。

生徒指導部から

命と心を守り育む教育への取組

～令和5年度活動報告～

生徒指導部長 板橋 宏明(川平小学校)

1 今年度の活動にあたって

仙台市小学校長会では、「杜の都の学校教育」の重点取組事項の一つである「豊かな心の育成～命と心を守り育む教育～」を受け、活動の重点の一つとして「命と心を守り育む教育の推進」を掲げ、取組を進めている。生徒指導部としては、「児童の健全育成等今日的課題に対し、その指導と対策の充実を図り、校長の学校経営及び各校における生徒指導実践の一助に資する」ことを方針として、「調査研究」「関係機関との連携」「研修」「復興七夕」の四本柱で活動に取り組んだ。

特に今年度は、5月8日に新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことに伴い、これまで開催を見合わせてきた「関係機関との連携」や「研修」についても、教育の今日的課題に向き合うために「参集型」で開催していくこととした。

2 活動の概要について

(1) 調査研究の推進

昨年度まで3年間にわたり取り組んできた調査研究の成果を引き続き、現在の学校教育における喫緊の課題である不登校問題をテーマとし、「不登校児童に対する支援の実際」を研究主題として取り組んだ。

昨年度までの成果として、各校より集約したケースの概要やその具体的な対応、外部機関との連携の在り方について取りまとめ、各校にフィードバックすることで、学校経営の一助とすることができた。

今年度は、昨年度の取組の中で見えてきた不登校対応に関する課題を更に掘り下げ、各校での別室対応の状況や、効果のあった不登校対応の事例について、アンケート調査を実施した。

調査研究の詳細は、仙台市小学校長会発行の「研究紀要」を御覧いただきたい。

(2) 学校間連携

昨年度、学区内に児童養護施設が所在する小学校(8校)を対象校として、児童養護施設との連携体制等を整備し、各学校の情報交換や社会的要請から派生する諸課題への対応を協議することを目的に、「児童養護施設等に係る学校連絡協議会」を立ち上げ

た。

本協議会の設置の背景には、「家庭的養護と個別化」により児童養護施設が増加していることから、学区内に施設を持つ学校が増えてきたこと、令和4年度に「こども基本法」が施行され、アドボカシー(意見表明権)について一層高い意識が求められていることの2点がある。今年度は、5月と11月に協議会を開催し、仙台市児童相談所の行政教員を講師として招聘して研修を行った。児童相談所の仕組みや役割等についての理解を深めるとともに、各学校の現状と抱えている課題について共有を図った。

また、10月には「仙台市小中学校長会生徒指導部合同会議」を開催することができた。小中学校の生徒指導部員が一堂に会し、事例等を発表し合った。本部会からは、昨年度まで取り組んできた「調査研究」の成果を発表した。中学校における生徒指導の実際を聞く貴重な機会となった。

(3) 関係機関との連携等について

「青少年対策六機関・小中校長会生徒指導部合同研修会」は、昨年度まで新型コロナウイルス感染症の影響で中止せざるを得なかったが、今年8月に4年ぶりに開催にこぎ着けることができた。青少年対策六機関合同会議に参加の各機関からの事業説明の後、医師で北部発達相談支援センター主幹の奈良千恵子先生より「発達特性が疑われる子供の支援と学校としての対応」と題して御講演を頂いた。発達特性を持つ児童への対応について、今後の学校経営に資する多くの知見を得ることができた。

「七夕オープニングセレモニー」は今年度も中止となったが、七夕まつり開催に向けての会議をオンラインで実施するなどの新たな取組も行われている。

3 次年度に向けて

昨年度「生徒指導提要」が改訂された。8月の合同校長会における文部科学省からの行政説明にもあったとおり、「させる指導」から「支える指導」への転換が求められている。

校長会としても、時代の変化に即した生徒指導の在り方を探り、よりよい学校経営と生徒指導実践に生かしていくよう努めていきたい。

新任校長所感

学校経営に寄せる思い



こま小の子とともに

遊佐 亮 (小松島小学校)

ここ小松島地区は市内中心部へのアクセスが良く、古くからの住宅に加えて高層住宅も建ち並んでいる。また、小松島小学校が開校する以前から仙台キリスト教育見院があり、平成18年からは教育的ニーズに応じた学びを推進する研究開発学校の実践により生まれた学習室システムが進化しながら引き継がれている。近年、一時的にこの地域で生活する人の中には外国籍の人も多くなってきており、小松島小学校に通う子供たちは、正に多様性という言葉がふさわしい状況にある。

教職員に目を向けると、若手からベテランまでが、子供たち一人一人に寄り添い、熱い思いで子供に関わっている。子供たちの乳幼児期の環境による育ちや発達面の課題等に応じた対応は、その子に応じた支援として当たり前のように行われている。

私ができることは、子供も教職員も一人一人の持ち味を発揮できるように環境調整を行うこと。今後、誰もが、その人らしく力を発揮できる小松島小学校であり続けるよう努めていきたい。

こま小に通ったこと、こま小で勤務したことを振り返ったとき、忘れられない思い出が一つでも多く残っていてほしい。

校長としてできること

上原 広樹 (生出小学校)

小学生の頃の私にとって校長先生は特別な存在でした。校長先生の朝会での話はしっかり聞き、言われたことをすぐに実行していました。そんな校長先生からある日、直接褒められたことがありました。とてもうれしくて、家に帰ってすぐ母親に報告したことを今でも覚えています。

教員になってからは、様々な校長先生と出会いました。中でも印象に残っているのは、厳しい中にも温かさがあり、私の進むべき方向について示して下さった校長先生です。私が手を抜いていることを見抜き、厳しい言葉を掛けていただきました。一方で、将来を見据えて様々な選択肢を示してくださいました。そんな校長先生との出会いをきっかけに、

自分の仕事への取り組み方が変わったような気がします。また、貴重な経験を通して、多くのことを学ぶことができました。

毎朝学校の入り口に立ち、子供たちと挨拶を交わしています。放課後になると先生方が校長室を訪ねてきます。子供にとって特別な存在としてどんな言葉を掛けてあげられるのか、先生方にとって一人しかいない校長として何ができるのかについて、日々考えながら過ごしていきたいと思います。

日々精進

佐藤 淑子 (荒巻小学校)

4月からの半年間はあっという間に過ぎました。転勤もし、職位も変わった年。校長として過ごさなければならぬ毎日を送るのに精一杯頑張りました。今では学校に到着しての毎朝の自分のルーティーンが定まってきているようにも思いますが、客観的に自分を見られるようになるにはまだ時間が掛かりそうですし、校長室には自分の上司の別の校長がいるように感じる瞬間があり、自分がその校長だったとはっと気付くとき、情けないやら笑ってしまいそうになるやら複雑です。ほかの皆さんにはこんなことはないのでしょうか。しかし、立場が変わるとまた違う見え方と感じ方があるということを経験する機会をいただいたことには感謝しています。教頭のとときの自分をたくさん反省することにもなっています。初めて管理職に就いたときは、同じ学校の中なのにまるで転職でもしたかのような仕事の違いと時間の流れを感じ、本当に驚きながら仕事をしました。果たして自分はどっちに向いていたのだろうかと考えることもあるのですが、早く自分らしく、小さくても自信を持って仕事ができるよう日々精進したいと思います。これまですばらしい先輩方ばかりにお世話になってきました。少しでも近付けるようにと今思っています。

焦らず、ゆっくり、楽しみながら

勢藤 芳弘 (四郎丸小学校)

4月、私が職員会議で一番はじめに話したことは、「全ては組織として、チームとして対応すること」

でした。そして、各方面に、「チーム四郎丸」には、教職員だけでなく、保護者も、地域も、児童にも入ってほしいという理想を伝えました。

そこで、この夏、学校運営協議会において、「四郎丸小の6年間でどのような姿になってほしいか」をテーマに、全教職員も入り、熟議を行いました。これが、チーム四郎丸のビジョンづくりの第一歩となります。学力、体力、家庭生活等、様々な話題が出ましたが、「子供たちの自己有用感・自己肯定感を高めること」がキーワードとして挙がってきました。新型コロナウイルス感染症や校舎改築の影響で、学校行事や地域行事が簡略化され、自己有用感を得られるはずだった場面が少なくなったからでしょう。今後は、子供たちの自己有用感を高める手立てを、学校（教職員と児童）・家庭・地域で考えていくこととなります。

今年度、半分以上の教職員が入れ替わり、大きく変わった四郎丸小。チームづくりは、まだまだ始まったばかりです。あせらず、ゆっくり、楽しみながら、時には迷いながら、進めていきたいと思えます。

地域を生かし、地域に生かされて

加藤 孝 (中山小学校)

本校4年生の総合的な学習の時間では「つなげよう中山の和」をテーマに「地域」について調べ、学ぶ学習に取り組んでいます。先日、そこで学んだことを基に、未来の中山の姿としてグループごとにまとめ、取材協力してくださった方々をお呼びし、発表会を開きました。内容は、地域活性のためのイベントやバリアフリーの街づくりなど、子供たちならではの視点で考えた発表ばかりでした。発表を聞いていた本校のSVさんが、「発表だけで終わらせるのはもったいない」と、子供たちが考えた企画を中山商店街理事会に提案してくださいました。すると、商店街の方々もその思いや発想力に驚き、今冬の商店街イベントで実際に行われることになりました。そのほかにも、お店での接客体験を計画してくださるなど、子供たちは自分たちの思いが地域に届き、夢がかなったと大喜びしていました。

中山小の子供たちは、商店街の方々をはじめ、温かい地域や保護者の方々に見守られていると日々感じています。私は校長として、子供たちの未来のために、これからも地域総ぐるみで子供たちを育てているこの温かい環境を生かしながら、学校運営を行っていききたいと思っています。

一事が万事

小原 貴之 (中野栄小学校)

「小原さん、何事も『一事が万事』だから。」

若い頃、同学年を組ませていただいた学年主任の

言葉がこれまでも自分の中心にあります。「一つの事を見るだけで、他の全ての事が押し量られる。一つの小さな事でも、ひいては万事その調子になる。」ということ。毎朝の交通指導では、「おはようございます。」と元気に子供たちや地域の見守り隊の方々と挨拶を交わして1日をスタートし、校内巡視をしながら授業参観を行い、先生方の日々の取組に学び、給食室や技師らの仕事ぶりに感謝をし、課題があれば職員皆で一緒に改善策を考える毎日です。子供たち、教職員、保護者、地域の皆様、たくさんの方々に支えられ、校長として自分はいるのだなと感じています。これまでお世話になった校長先生方や先輩の校長先生方のように、いつも優しくおおらかに、どっしりと構えて学校経営を行うことは難しいかもしれませんが。少しでもそうした校長先生の姿に近づくことができるよう「一事が万事」をこれからも肝に銘じて、子供たちを学校の真ん中に置いた学校経営に取り組んでいきたいと考えています。

「朝から機嫌良く」を目標に

石川 由紀 (東宮城野小学校)

4月1日に新任校長として着任してから、できるだけ毎朝通学路を歩くことにしている。子供たちと一緒に登校する保護者、登校を見守ってくださる学校ボランティアさんに挨拶し、ごみを拾いながらの約30分は、私にとって始業前のウォーミングアップの時間となっている。これは教頭時代の勤務校校長が毎日していたことで、私もいつか校長になったらやってみようと思っていたことの一つでもある。

朝から挨拶をして地域を歩くからには、元気にこにこしていることが大事。たとえ気乗りしない朝でも口角を上げ大きな声で挨拶することで、だんだん気分が上がってくるのだから、ポジティブな行動は大事なものだ。通勤途中のラジオでパーソナリティが毎朝「御機嫌は自分でつくるもの」と言っているが正にそのとおりである。子供に元気な毎日をと言うときに、まず私たち教職員が元気でなければと思う。校長がまず朝から御機嫌な状態をつくり、皆が気分良く一日を始められることで子供たちにとって楽しく過ごしやすい学校になっていくと信じて、これからも朝から機嫌良くいきたいと思っている。

原点に立ち返って

橋本 顕嗣 (郡山小学校)

中学校教員だった私に小学校の校長としてできることはなんだろうか。3月の内示を受けた時からしばらくの間、悶々と悩む日々でした。

4月になり、郡山小学校の子供たちの明るい笑顔に出会い、元気な声を聞くと、自分が子供と接する

ことが好きだから教員を志したのだという気持ちがよみがえり、この子供たちの笑顔を守りたい、明日も来たいと思う学校でありたいと強く思うようになりました。

そのために自分ができることは何だろうか。一人で校長室で考えていると、これまでお世話になった校長の姿が頭に浮かんできました。未熟だった自分を育てていただいたこと、悩んでいる自分の背中を押していただいたことなど…。そしてそのおかげで今の自分があるのだと強く自覚しました。

今、私の務めは校種にとらわれず、一人一人の子供たちの学びを保障し、安心・安全な学校づくりのために、現場の教職員の皆さんが力量を十分に発揮して、やりがいと誇りを持って仕事ができるようにすることと捉えています。画期的なことは難しいですが、これからも一人一人、先生方と丁寧な対話を心掛けていきたいと思えます。

今、思うこと

及川 卓也 (茂庭台小学校)

緑豊かな団地内に小学校があります。タワーマンションが一際目を引きますが、樹木の多さも団地の特徴です。

子供たちは明るく素直で、教職員は意欲的に教育活動に取り組んでいます。協力的な保護者や地域の方も多くいらっしゃいます。

4月から半年がたちました。いまだ目先のことに追われ、その日を無事に終わらせるので精一杯ですが、少しずつ、校長としての務めを果たしていきたいと考えています。

着任以来、漠としていますが感じていることを二つ挙げます。一つは、やはり、学校は子供にとって楽しい場所であるべきだという思いです。厳しい生育歴を持っていたり、難しい家庭環境を背負っていたりする子供も多いので、なおのことこの思いを強くしています。

もう一つは、「初心を忘れない」ということです。これは歴代校長写真の中に、初任校でお世話になった大先輩のお姿があり、また、団地内の中学校には、初担任での教え子が勤務しているといった巡り合わせなどから、浮かんできた思いです。

今後も、楽しい居場所である学校づくりを進めるため、初心を忘れず、校長として自分がすべきことに丁寧に取り組んでいきたいと考えています。

自分探しの旅

及川 悦彰 (田子小学校)

夢は何ですか？ 今の自分は輝いていますか？

世の中では予測不可能な時代を迎え、夢もなく自分を見失ったり、不安を抱えたりする人が多くなっ

ているように思われます。また、最近では相次ぐ事件や事故に心を奪われ、いつの間にか心を燃やし、何かに夢中になるということをおぼえている自分をふと感じることがありました。

今年、私は田子小学校の校長室から校庭を眺めると、時に時間を忘れるほど、夢中になって校庭を走り回り、自分の持っている全てを懸けて、全身汗だくで友達と遊ぶ笑顔の子供たちがいました。時に、友達と本気でけんかして涙を流し、先生に慰めてもらう子供。時に、友達と競い合い、途中で転んでも立ち上がり、泣きながらゴールを駆け抜ける子供。子供たちはいつも真剣で素直で、人との関わりを大切に、自分自身と向き合って挑戦していました。その光景に出会い、私は胸が熱くなりました。

私は校長として、子供たちの夢が膨らむように、「自分探しの旅」を支えたい。また、自分に何ができるのか、私自身も新たな気持ちで「自分探しの旅」を始めたいと思いました。日々、子供たちに明日を生きる勇気と知恵を育てていきたいと思っています。

子供たちの期待に応えるために

菊地 隆夫 (幸町南小学校)

幸町南小学校長に命ぜられたのは、2月20日でした。突然のことで頭の中が混乱したまま職員室で挨拶したことを、今も鮮明に覚えています。そんな状況で私に落ち着きを取り戻させたのは、子供たちでした。多くの児童が笑顔で私の目を見て挨拶をしてくれました。私に期待してくれているというメッセージが伝わってきました。

今年度、協働型学校評価重点目標を「子どもたちの自己肯定感・自己有用感の育成」としました。

自分には存在価値がある。必要な存在。大切な人間。平たく言うと「私は私でいいんだ」と思える子供を育むことです。その土台があって、生活習慣や学習習慣ができます。その土台があって、意欲的に生活をするようになります。自分のことを大切に思えない人は、他人のことも大事にできません。そのためには「受け止めてもらっているという安心感」が大切です。それがあって、自分でやろうという意欲・自律につながるのだと思います。

幸町南小の子供たちの期待に応えるべく、大人たちが一人一人の児童の声に耳を傾け、児童を大切に作る学校づくりに励んでまいります。

明るい笑顔で、よりよく成長できるように

成田 栄子 (吉成小学校)

吉成小に校長として着任してから、半年たちました。今日も「太陽の丘」には、子供たちの元気に遊ぶ声が響き渡っています。半年たって、つくづく思

うことは、学校は、たくさんの地域の皆様、保護者の皆様、子供たちのために懸命に働く教職員に支えられているということです。

常に子供たちの学習環境を考えてくださり、暑い図書室にエアコンを設置し、通学路の落ち葉掃きもしてくださるPTAの皆様をはじめ、交通指導ボランティア、学校運営協議会委員、学校支援地域本部SV、小1サポーターなど、たくさんの皆様に御協力を頂いています。教職員は、お互いを思いやり、明るく声を掛け合いながら子供の指導に当たっており、来校したお客様から「先生方が、明るいですね。」「この人材が吉成小の財産ですね。」と何度か言っていたきました。有り難いことです。この吉成小を築いてきてくださった先輩方に感謝しています。

子供たちが明るい笑顔で、より良く成長できるように、教職員がやりがいを持って働くことができるように、校長としてどのように取り組むべきか、広い視野で考えられるよう研鑽を積み、粘り強く実行し、力を尽くしていきたいと思えます。

「地域と共に歩む学校」を目指して

清 秀子 (福岡小学校)

「こんにちは。地元民です。今日の午後に我が福小にすてきな虹が架かりました。すくすくと元気に育ちますように！」ある日、地域の方から、きれいな虹の写真が添付されたメールが学校へ届きました。地域の方が、仕事の手を止め、子供たちのことを思いながら送ってくださったことに感激しました。

本校は、伝承活動(鹿踊剣舞)、田植え・稲刈り、野菜の栽培、梅干し作り、だんごさしなど、地域の方々の御協力を頂きながら取り組んでいる活動がたくさんあり、支えていただいております。

コロナ禍ではできなかった地域行事が少しずつ復活し、参加する中で、地域の方たちと顔が見える関係になりつつあります。先日、地域の方を訪問した際に、「ここで失礼します。」と私が玄関から帰ろうとすると、「いつも校長先生に門まで送っていただいているから、私も(門まで)送ります。」と言って、笑顔で送っていただきました。心がほっこりと温かい気持ちになりました。

これからも、地域の方たちに対するリスペクトの気持ちを持って丁寧に対応し、地域と共に歩む学校経営に取り組んでまいります。

子供の心に火をつける

高橋 英之 (南光台東小学校)

4月早々、お世話になった5名の退職された校長先生方より、激励の葉書が届きました。尊敬する諸先輩方の温かい励ましの言葉に、ただただ感謝の気

持ちと身の引き締まる思いで一杯になりました。手本となる先輩方の姿を思い浮かべ、精進しなくてはという気持ちを忘れないために、その葉書を今でも大切に通勤バッグに忍ばせています。

「最高の教師は 子供の心に火をつける」

これは、若手教員時代に出会った言葉です。子供のやる気を引き出すことに成功した先には、いつも満足感や達成感に満ちた子供たちの最高の笑顔が待っていました。この笑顔を引き出すために何をすべきなのか、教師としてどうあるべきなのか、という思いが、私の学級経営の基盤となりました。

東小が笑顔あふれる活力ある学校であるために、校長自らが率先して笑顔を決やさず生き生きと過ごしていこうと思っています。子供の最高の笑顔を作り出すためには、熱意ある多くの大人の支えや協力が必要です。教職員・保護者・地域が三者三様に情熱を持って子供に関わり、子供の喜びあふれる笑顔を多くの方々と分かち合うために、東小に関わる大人たちの心にも火をつける学校経営を目指し精進していきたいです。

人のつながりを大切にしながら

笹川 恵悟 (西山小学校)

「もしかして笹川先生ですか。お久しぶりです。」今年度、地域の行事や会議でお会いした方々から、たびたびお聞きした言葉です。

実は、現任校の隣の燕沢小に20数年前、8年間勤務していたことがあり、その当時に学校を支えてくださった方々が、私のことを覚えていて声を掛けてくださったのでした。再会するたびに昔話に花を咲かせ、うれしさや懐かしさを感じる出会いとなりました。

現任校の地域の方々ともよくよくお話をしてみると、以前お会いしたことや一緒に活動したことがあった方がいらっしや、着任したばかりで不安だった時期に、何らかのつながりがあったことを知って安心した気持ちにさせられました。

西山小は協働型学校評価の重点目標に「進んで挨拶する子供」を掲げています。学習指導要領で「学校を核とした地域づくり」が示されていることについて、西山小では挨拶活動を推進することにより地域とのつながりをつくっていきたくと考えています。そして、子供たちが10年先20年先に、懐かしい思い出を語り合えるように、人と人のつながりをつくるために、日々挨拶などの教育活動に取り組んでいるところです。

「子供ファースト」を胸に

黒川 利香 (南吉成小学校)

先輩校長の「校長には常に判断、決断が求められる。熟慮も大切だが、常に時間を掛けてはいられない。迷った時は子供ファーストで考えよ。」という言葉をかみ締めながら日々を過ごしています。「迷ったときは子供ファースト」。シンプルで当たり前のようですが、これがとても難しいのです。

先日、4年ぶりにPTA主催の「森の子まつり」を行いました。実施に当たっては、「コロナ禍で中止したのを機にやめても良いのでは」「引き継ぎができずノウハウがない」「委員の負担が大きい」などの消極的な意見が多数あり、紆余曲折を経ての手探りの開催でした。しかし、当日の盛況ぶり、はしゃぐ子供とそれを見守る大人の笑顔が印象的な一日となりました。担当した委員の方からも「準備や話合いに時間が掛かって正直大変だったけど、子供たちの喜ぶ姿を見たらやって良かったなあと思いました。」とすてきな感想を頂きました。

今般、保護者のニーズが多様化し、地域との協働や、教職員の働き方改革など取り組まなければならない課題が山積し、判断に迷う場面が多々あります。だからこそ、迷ったときは「子供ファースト」を思い出し、学校経営に取り組んでいきたいと思ひます。

「笑顔・チャレンジ・思いやり」地域と共に

内田 裕子 (泉松陵小学校)

泉松陵小学校は、平成24年3月、松陵小学校と松陵西小学校の閉校に伴い、新たに泉松陵小学校として開校しました。今年度開校10周年記念行事を執り行っています。子供たちの心に残るものと様々なことが企画され、実行委員の保護者を中心に地域の方々の御協力を得ながら、これまでに記念植樹、タイムカプセル、10周年記念誌、子供たちによる花壇のペインティング等、子供たちの活動を核とした取り組みを進めてきました。

着任してから多くの地域の方々とお話しする機会

がありました。「うちの子供や孫もこの学校を卒業したんですよ。」「私もこの卒業生です。」という言葉がよく聞かれます。開校して10年がたった学校ではありますが、それ以前からの地域の学校として根付いた場所となっていることを感じさせられます。そして、地域の学校として力になれることがあればとボランティアを引き受けてくださる方がたくさんいてくださり心強く思っています。

今後も、諸先輩方が築き上げてきた顔の見える関係や「笑顔・チャレンジ・思いやり」を大切に、地域と共に未来を切り開く子供を育てていけるように務めていきたいと思ひます。

ポジティブな関わりをたくさんの学びに

我妻 美知子 (荒井小学校)

初めて荒井小学校を訪れたとき、最初に目に入ったのは、静まり返った校庭に植樹したばかりの小さな木々でした。その凜とした姿を見詰めていると、併設している児童館から聞こえてくる子供たちの元気な声。開校4年目の春を迎え、荒井小学校が確かな歴史を刻んでいることを感じました。そして、この学校で校長としてのスタートを切れることに喜びを感じました。

校門で子供たちを迎え、一人一人に話し掛ける日々が半年以上経過しました。最近では子供たちから「雨の中ありがとうございます。」「寒くないですか。」など、優しい言葉がたくさん返ってきます。また、送ってきた保護者や通勤途中の地域の方とちょっとした話をするこも、喜びとなっています。こうした日々の積み重ねが、校長としての大切な役目であると感じるようになりました。

今年度の重点目標は「ポジティブな関わりをたくさんの学びに」。校長室から出て、人と関わり、話を聞くことは、学校や地域を知ることにつながります。校長室を訪れる地域の方も増えてきました。今後も人とのつながりを大切にしながら、まだ新しい学校の学校運営に取り組んでいきたいと思ひます。

編集後記

今年度の会報「廣瀬川」は、「社会の大きな変化と今日的課題への対応を通し未来を切り開く児童を育む学校経営」をテーマに作成いたしました。105号では、仙台版コミュニティ・スクールをテーマにした座談会の様子について詳しく取り上げています。また、視聴覚部会、特別活動部会の各種大会での報告や、校長先生方の学校経営に掛ける思いも掲載しています。皆様にとって、有益な情報が満載の会報誌に仕上がったと自負しております。

教育現場は、社会の変化に合わせて、常に「変化」が求められています。コロナ禍を経て、何が正解か分からない中でも、私たちは判断し、前へ進まなければならないことを経験しました。校長先生方の思いを共有することは、前進するための力になると考えているので、この会報誌が皆様の前進の一助になれば幸いです。

「廣瀬川105号」の発行にあたっては、多くの方々から御協力をいただきました。御執筆いただいた校長先生方には深く感謝申し上げます。今後とも当会報誌をどうぞよろしくお願ひいたします。

(105号チーフ 我妻 記)

編集担当者：我妻 美知子 (荒井小) 山根 斉 (南中山小) 笹川 恵悟 (西山小)